

一

我々には膨大なエネルギーが必要だった。

太陽系は大宇宙に数多存在する恒星の基準から云っても決して大きな恒星系ではない、寧ろどちらかと云えば矮小な部類に属する。発生されるエネルギーも我々からすれば微々たるものだった。我々に必要なエネルギーを安定供給できるとは到底思えない、とてもではないが魅力的だとは云い難かった。

その第三惑星、原住民が地球と呼称する小さな星。我々は現在ここにいる。

当然我々には目的がある。そしてそれはこの星の僅かな資源を搾取することではない、しかしエネルギーの搾取という意味では間違いはなかった。

脳の発達した生物には絶望という感情が存在する。我々はそれをエネルギーに変換するシステムを発見した。我々はそれを絶望エネルギーと名付けた。

我々の目的はその絶望エネルギーの搾取である。

現在地球上に絶望エネルギーを潜在的に保有する生命体は七十億ほど生存している。即ち地球人類のことである。これらすべてから絶望エネルギーを安定供給できれば我々には今後とも繁栄が約束されることだろう。

変換装置の設置は既に滞りなく仕掛け終わっている。後は我々が彼等の眼前に絶望の対象として顕現すれば良いだけである。

問題があるとすればその方法だった。我々はこれまでも諸々の恒星系でこの計画を試みたのだが、その殆どは失敗に終わったのだ。否、正確には予定していたエネルギー供給に満たなかったと云うのが正しい、我々が圧倒的な科学力と暴力で侵略しても彼等の絶望は長続きしないのである。実に一世紀も経たぬ内に慣れてしまうのだ。

我々の間ではその問題に対するあらゆる対策がなされた。高々一世紀余り供給されただけ

のエネルギーでは次の恒星系へ赴く移動分のエネルギーを確保するだけでやっつとである。我々の憂慮は当然であった。

幾度かの試行錯誤を繰り返し対策を講じ我々の総論は決した。それは絶望へと至る過程にこそ絶望の純度を決定する因子があると云うものである。

それは即ち搾取対象の希望の埋蔵量であった。

希望が大きいほど絶望の深度が増すのである。考えてみれば当然のことであった。

我々はその事実に行き着いてからと云うもの、より希望に満ち溢れた恒星系を模索した。そして漸くたどり着いたのがここ地球である。

彼等地球人類は大変希望に満ち溢れていた。

その原因を我々は仔細に調査した。しかし手間は殆ど掛からなかった。原因は瞭然だったのである。

光の巨人、あるいはウルトラアーク、そのような呼称で地球人に称えられている存在が彼等の希望の原因と見てまず間違いはなかった。

我々以外にも地球侵略を企てる宇宙人は相当数存在していたようで、その殆ど、否。全てがそのウルトラアークに因って退散か殲滅の憂き目に遇わされたようであった。

ではウルトラアークとは何者であるのか、我々はウルトラアークの詳細なデータを収集した。

アークとは現地語で聖櫃を意味する固有名詞である。ウルトラアークは巨大な箱に横たわった姿で発見されたのだ。それ故地球人は便宜上アークと呼んでいるようである。ウルトラと云う呼称の方は単に強く巨大なその容姿を幼稚に表現した単語だろう。

ウルトラアークが初めて地球人の前に現れたのは、地球の古来種である怪獣チギリ（千切り湖という湖から出現した為こう呼ばれる）が都市開発の影響から覚醒し人類を襲い始めた時であった。ウルトラアークはこれを難なく撃退し空の彼方へと姿を消した。その後も地球人にとって脅威となる現象の際には必ずといってよい頻度で参上しこれを解決へと導いている。

このことからウルトラアークは地球人と何らかの関係がある巨人だと我々は判断している。少なくともウルトラアークは地球人に悪意や敵意は持つてはいないようであった。恰も地球人の守護者でも在るかのようには振舞っている。

それは我々にとっては好都合である。我々が地球人を攻撃すればウルトラアークは必ず現れるはずである。

ならば我々はウルトラアークに関係が深いと思われる地球人数名を拉致しさらに詳細なデータ、主に戦闘能力に関してのデータを調査しなければならなかった。何故なら前提として我々の戦力で対抗できるのか否か、それをはっきりさせておかなければならないからだ。

結論から云えばそれは問題にならなかった。これまで侵略してきた宇宙人の殆どは地球の資源が目的のようだった。我々からすればそれは微々たるものである。彼等と我々には扱っているエネルギーの量に膨大な差が認められる。それはイコール戦力差といっても差し支えないものだろう。そんな彼等諸侵略宇宙人との戦闘に於いてもウルトラアークは度々の苦戦を強いられていた、我々との勝敗は目に見えている。相手になるはずがなかった。

戦闘履歴の集積から分析してもウルトラアークの戦闘能力は我々にとっては取るに足りないほど脆弱なものであった。

ウルトラアークは戦闘中に体力を消耗すると胸部にある水晶体のような突起物が赤く点滅を開始する。地球人はその部分をエナジータイマーと呼んでいる。地球人が記録した映像媒体から我々はその事実を知ったのだがどうやらこの部分がウルトラアークの急所らしかった。つまりこれを破壊すればウルトラアークは死ぬのである。実に容易い。

これで判断材料は十分に集まった。我々は計画を実行することにした。

二

ルナリージオ、我々の言葉で『約束された絶望』という意味だ。

その名に恥じぬ圧倒的な戦闘能力を秘めた破壊兵器である。

ルナリージオは絶望エネルギーに因って起動する。つまりルナリージオの破壊活動が進めば進むほどその戦闘力は増すのである。

我々は絶望エネルギー搾取計画の為にルナリージオを開発したが、それ以来ルナリージオに疵を負わせたものは唯一つとして存在しない、当然ウルトラアークもその例外ではないだろう。

外装は漆黒、細身の装甲板は鋭利な暴力を予感させる。地球上の生物に喩えるならばカミキリムシという昆虫に外見上の特徴が酷似している。

我々はルナリージオで都心部への強襲を開始した。ルナリージオの巨大な足で都心の交通用道路を破壊していく、居住区の破壊は意図的に避けた絶望エネルギーを最も多く搾取する為にはより多くの人類の生存が望ましい、無闇に殺害してはならなかった。ルナリージオは人的被害が最小になるように慎重に歩を進める。

当たり前だが地球人も数々の異星人の侵略行為に対して対策を講じていた。特殊敵性存在対策本部なる組織を都心に設け、そこから各軍備施設に直接命令を傳達していた。

居住区への二次災害を極力避ける為に米国と共同開発した特殊弾頭がルナリージオの頭上に投下された。爆発した被災物がもう一度爆心地点に向って収束するという磁力を用いた特殊弾頭である。見舞われた側は一発で二度の攻撃を受け且つ周囲に被害が拡がらないという優れた軍備であった。我々は地球人の創意工夫に素直に感心した。

だが無論ルナリージオには傷一つ付かなかった。滑らかで鋭角な表皮は相変わらずの光沢を放っている。爆弾を投下した戦闘機のパイロットに焦りの色が窺える。その微弱な絶望エネルギーに変換してルナリージオの駆動力が僅かに増大した。

その時ルナリージオの背後に強大な風切り音が感知された。センサーを向け確認する。ウルトラアークである。

概算で100キロメートルは離れているが、数秒でその距離が縮まって行く、少なく見積もっても音速の十倍は出ているだろう。ウルトラアークの飛行速度は地球上のどこへでも僅か数十分の内にたどり着くことが出来るだろう。

先程のパイロットからも既に焦りの色は消えていた。恐らく彼等の作戦目的はウルトラアークの到着まで時間を稼ぐことなのだろう。目的は達成されたと云う訳である。

後は光の巨人がルナリージオを倒してくれる。そう彼等は信じているのだ。

「シュワツチ」

巨人は着地すると同時にそう叫び、両手を前に構え戦闘の姿勢を取った。

鈍く銀色に輝く巨体に深紅の模様がまるで炎のように浮かび上がっている。その厚く発達した胸板には燦々と青く煌くエナジータイマーが光っている。

我々はルナリージオをゆっくりと振り向かせその部分を凝視した。

ここを破壊すれば簡単に勝負は決する。

しかし我々の目的は短期決着ではない、より多くの人類の絶望を喚起することでありその為にはウルトラアークのあらゆる攻撃に耐え勝利への全ての可能性を摘み取る必要があるのである。

### 三

「ヘアツ」

ウルトラアークはルナリージオに組み付くとそのまま勢いよく投げ飛ばした。相当の距離を飛ばされた。ウルトラアークの体格は巨大なルナリージオにも決して引けを取らない、しかし同程度の質量を有する敵をこれほど容易に放り投げるとは並々ならぬ膂力である。

当然ルナリージオには何の損傷も認められないがそれでも我々は少し驚いた。随分緻密に調査したのだがやはり実物は迫力が違うものである。

ルナリージオが投げ込まれた場所は国有地を更地に均した荒蕪地であった、周囲は見渡す限り何もない。どうやらここは日本政府が用意した、ウルトラアークが怪獣や異星人と心置きなく戦う為の闘技場のようなものである。

住民に被害が出ないのは我々にとっても好都合だった。

「ダアアアッ」

投げられ倒れたままになっていたルナリージオにウルトラアークが馬乗りになった。そのまま水平に手刀を打ち込む、間断なく幾度も打ち込まれ砂埃が舞い上がる。しかしルナリージオにダメージはない寧ろ攻撃している巨人の方が消耗している。

「フウウオツ」

ウルトラアークは掌の痛みに耐え兼ねたのか馬乗りを解きルナリージオから距離を取った。痛々しく掌を擦っている。

ルナリージオは暫くして悠然と立ち上がった。殆ど音も立てない。

牽制に破壊光線を発射する。誤ってエナジータイマーを破壊して仕舞わないように威力を抑えたものである。ウルトラアークは両手を突き出し眼前に長方形の光の壁を作り出した。映像媒体での調査中に何度か見せたバリアである。破壊光線はそれと衝突しけたたましい破裂音を残して消滅した中々の防御能力である。

「へアアアアキユッ」

ウルトラアークはルナリージオが光線を発射した隙を衝き、回転鋸に似た光の輪を作った。これも何度も見た、鋭利な刃状の光輪が敵を切り裂く技である。ウルトラアークはそれを振りかぶって投擲した。凄まじい速度で放たれた光輪はしかし。パリンツという呆気ない音を立てて砕けた。ルナリージオの装甲にはその程度の切れ味では歯が立たないのだ。

「フウウアッ!?」

ウルトラアークはうろたえたような素振りを見せる。防衛部隊に護衛された報道機関がその様子を全人類に伝えている。

我々はルナリージオの広域感覚器官を駆使して人類の反応を収集し吟味する。

「そんな……ウルトラアークが……」

「ウルトラアーク頑張って」

「負けるなウルトラアーク」

「アークスラッシュが効かないなんて……」

「あ……あの黒い奴は今までのどんな怪獣や宇宙人よりも強い、勝てるのかアーク」

「このままじゃアークが……」

「いや、まだアークにはグランドクロスがある」

等々の様々な反応があった。過半数の人類が既に光の巨人の勝利を危ぶんでいる。しかしまだ諦めず勝利を祈っている人類も相当数いる。

グランドクロス、まだ諦めていない彼等がその希望的観測の憑拠としているもの、それがグランドクロスというウルトラアークの切り札であることは明白であった。腕を十字に交叉させ最大エネルギーを放出する光線技、それは正に必殺である。これまでウルトラアークと対峙した全ての敵性存在はグランドクロスに耐え切れることは出来なかった。天地を震わせるほどの強力な熱と波動に体組織を焼かれ分解していくのである。

「ダアアキュッ」

ついにウルトラアークが腕を交叉した。我々はルナリージオを身構えさせる。

流星にまともに受けるのは危険かも知れないからだ、腕を構え防御の体制を取る。

しかしグランドクロスは発射されなかった。よく見ると腕の交叉も十字ではなくX状である。

「ウウウウウウウツ、ヘアアアアアアツ」

ウルトラアークは強く力んで背中を丸め、一気にその姿勢を開放させた。

その瞬間、身体に彩られた深紅の模様がまるで燃え盛る劫火のように全身に広がっていった、それと同時にしなやかだった巨人の躯体が武骨に体積を増していく、密度の高い強靭な筋肉が盛り上がっている。

それはパイパーモードと呼ばれている。ウルトラアークが格闘能力を極端に突出させた状態であった。エネルギーの消耗が激しく強力な敵にしか仕様したことはない、この状態に成ったということは短期決戦を狙っているのだろう。